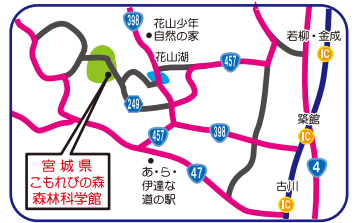


こもれびの森通信 7 2014 月号

発行 宮城県こもれびの森 森林科学館
〒987-2512 宮城県栗原市花山草木沢角間 10-7

TEL&FAX 0228-56-2330
http://mifi.main.jp/komorebi.htm



イベント報告

こもれびの森ウッドランドクラブ



6月8日、低気圧の通過で朝から土砂降りの雨模様にかかわらず、カプトムシファンの熱い視線の中、ウッドランドクラブ「カプトムシの飼育講座」のイベントが開催されました。カプトムシの紙芝居を見て、カプトムシの飼育の注意点を聞いた後、ピオテープで実際に幼虫の掘り起こしです。初めて幼虫に触れた子供達も多くいましたが、貰った幼虫のオス、メスの見分け方を講師の方々に真剣な表情で確認していました。7月上旬には成虫に育ちます。結果を写真等に撮ってハガキで森林科学館にお知らせ下さい。返送されたハガキを森林科学館内に貼り出す予定です。

一方、青空レストランでは棒パン焼きに挑戦し、美味しい焼き上がりに参加者は大満足の1日でした。(小山)



6月22日、ヨモギで草木染めをおこないました。各々五種類の媒染液から選び使用。鈴の媒染で仕上がった柔かい黄色が印象的でした。29日は古布での兎作成、蚕の豆知識を仕入れた後同じ材料で作りました。各々、作り手に似ていて可愛い38の兎が仕上がりました。(小林)

こもれびの森の かわいいことりたち

こもれびの森サポーターで
専属ことりカメラマン(?)
の大友さんのコーナーです

ミツケ! こもれびの森

こもれびの森でみつけたよ

山のことなら何でもプロ級、サポーターの(は)さんのコーナーです。

“科学館生まれのキセキレイ” 無事巣立つ



写真①6月3日 卵が5個、大きさは18mm×15mmぐらいです。
写真②6月10日 抱卵する親鳥。じつところを見つめ親鳥、風格があります。
写真③6月14日 ふ化しました。うぶ毛に包まれ、口を大きく開けて餌をねだっています。
写真④6月25日 残念ながら、巣立ちの瞬間は見るできませんでした。でも園内で幼鳥を見つけました。頭にまだうぶ毛が残っています。

“森の王者クマタカ・・・キツネをゲット”

科学館向かいの山から現れたクマタカが何かぶら下げて飛んでいました。キツネの子供のようです。Kさんが園内でキツネの親子連れを見たそうです。もしかしてこのキツネの家族かも? 自然は厳しいですね。それにしてもクマタカは強い! (大友)



“私の名前は?”

溪流釣りで餌にする川虫捕りの時に、時々サンショウウオがタモ網に入ってくる。サンショウウオはイワナ釣りの極上の餌であり、大物狙いの時に使っていて実績も結構なものである。サンショウウオは科学館の水路にもいる。石をひっくり返すと簡単にタモ網に入ってくる。サンショウウオは日本に約20種がいるといわれ、大方が頭にエゾヤホクリク、ヒダなどの地方名が付いている。体の色や姿、尾の長さなどの違いはあるが、どれもが似ていてなかなか同定が困難である。はたして科学館の水路にいるのはどれだろうか。凶鑑を見ながら、クロとハコネ、トウホクの3つに絞り込んだ。その中から小生は「ハコネサンショウウオ」に決めた。決め手は、尾の長さや全身の細身加減と斑模様からで、いわゆる「美人系」だったからである。(は)



まめちしきコーナー

似た花同士 ～「ハルジオンとヒメジョオン」～



＜ハルジオンとウスバシロチョウ＞

道端などに普通に咲いている花ですが、花だけ見ると区別しにくい野草ですね。漢字では「春紫苑」(ハルジオン)・「姫女苑」(ヒメジョオン)と書きます。ともに北米原産の帰化植物で、「姫女苑」は明治時代に、「春紫苑」は大正時代に持ち込まれました。区別のポイントは、「春紫苑」は茎の中が空洞で「つぼみ」がうなだれて下を向いていること。「姫女苑」は、「春紫苑」が終わった後に開花し、茎は空洞ではなく、折るのが大変なほど強いことです。

いずれも「要注意外来生物」に指定され、後で入ってきた「春紫苑」の方が勢力を増しているようです。

「ハルジオン」とか、「ヒメジョオン」と呼ぶこともあるようですが、正しい名前と呼んであげよう…(千葉)



＜ヒメジョオンとスジグロシロチョウ＞

雑記

『安全のABC』: 森林科学館への途中ラジオから聞こえてきた言葉です。Aは“あたりまえのことを”B“ばかにしないで”C“しっかりやる”だそうです。私達の日常業務は当たり前で満ち溢れています。炎天下での園内整備や清掃など地味で目立たない作業をこつこつ行ったり、使った道具の掃除と整備そして次に使う人が気持ちよく使えるように片付けて置くことなど、安全だけでなく当たり前のことが無言のコミュニケーションとなり、感謝とお互いの信頼関係を強くしていくのではないかなどと考えた一日でした。(山本)